

ゆりかごの鍵は雪風の
使い魔

楠木 蓮華

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ミットチルダには、一人の少女がいた。

その少女は少し昔、ある事件のせいで生み出され……この世に生を受けた。

だが今は、その事件は解決し……素敵な家族や仲間達と共に、素敵な日々を過ごしていた。

だがしかし……そんな日々を送っていたある日のこと。その少女は鏡のようなものに吸い込まれ……なんと、異世界に召喚されてしまった。

その召喚主は、大人しく……少し悲しげな雰囲気をもった少女、タバサだった。

召喚されてしまった少女……高町ヴィヴィオは一体どうなってしまうのか。

異世界で、なにをし、何を変えていくのだろうか。

注意……この作品はゼロの使い魔の二次創作でありながら、作者はゼロの使い魔はアニメでしか見たことがありません。なので、タバサの冒険の内容は全くと言っていいほど反映されません。なので、それが嫌な方は見ないことを推奨します。半分オリジナルのようなものだと思います。

また、高町ヴィヴィオの能力として、原作と違うところは……母親、高町なのはのよ
うに飛ぶことが出来ることが違いとして挙げられます。また、他にも出た場合には随時
報告を致します。

目次

元ゆりかごの鍵は召喚される	—	1
呼び出されたのは言葉が通じない世界		
9		
退学疑惑と微熱との邂逅	—	17
タバサの悪夢	—	29
貴女を助けたいから	—	40

元ゆりかごの鍵は召喚される

「ん〜っ……今日もいい天気〜！」

カーテンを思いっきり開け、太陽の光を浴びながら伸びをする。この動作は朝起きてからはいつもする動作で、これはもう週間になってます。やっぱり朝は太陽の光を浴びないと、起きたって感じがしませんっ。

おっと、まだ自己紹介をしていませんでした。いけないいけない。私の名前は高町 ヴィヴィオ、ミットチルダ在住で、魔法学院初等科四年生の十歳です。

太陽の光を存分に浴びた後は、窓を閉めてお着替えをしますっ。学院祭が終わって、今着ている秋服にもだいたい慣れてきました。でもやっぱり中等科の制服がとっても可愛かったので、ちよっぴり着てみたいなあ……なんて思ったりもしてます。

アインハルトさんに頼んだら貸してもらえるかな……？
なんてことを考えているうちにお着替えも終了。

「髪の毛よしっ、制服よしっ！」

おかしいところがないことを確認すると、部屋を出て一階におります。

「あ、ヴィヴィオ〜、おはよ〜♪」

「おはよう、ママ〜♪」

このサイドテールがとっても素敵な女性は私の母の高町なのはさん。公務員さんで、私の大切で大好きなママですっ。

「今日はヴィヴィオ、日直だっけ？」

「うん、そうなの〜、だから今日はトレーニング出来なくてちよつと残念」

私はストライクアーツっていう、競技をしているのですが……今日は学校の日直があつてトレーニングができず、少し悲しいです。でも終わった後に、リオやコロナ……アインハルトさん達と一緒にトレーニングをする約束をしていたので、それはとても楽しみだったりします。

「まあ、学校終わった後に皆とするんでしょ？」

「うんっ！」

「ならその時まで我慢だね」

「そうなの〜、あつ……今日も美味しそ〜♪」

ちなみに余談なのですが、私はママの作る料理が大好きです。とっても美味しくて、朝からほつぺが落ちそうになります！

「ふふ〜ん♪ 今日も愛情を込めて作ったからね〜」

「じゃあ、早速……いただきま〜す♪」

「は〜い、召し上がれ〜♪」

手を合わせて、いただきますをした後……ママの朝ごはんを食べます。やっぱりいつも通り美味しくて、ヴィヴィオはとっても幸せですっ。

そんな感じで朝ごはんを食べていると、ふとママが何かを見ていました。よく見てみると、そこには青くて綺麗なペンダントのようなものがありました。

「ママ、それなに?」

「あ……これ?」

私がそう聞くと、ママはなんだかとても懐かしそうな……そして楽しそうな顔をしながら言いました。

「これはね……? 私がまだ小さかった……ヴィヴィオくらいの頃かな。その時に迷い込んでしまった場所の、ある人から貰ったものなんだ」

「も、ももも、もしかして、男の人?!」

私が身体を乗り出して聞くと、ママはくすつと笑った後、首を横に振りました。な、な、くんだ、と安心していいのか安心してはいけないのか、ヴィヴィオはちよつと複雑な気分です。

「これはね? 青い髪がとっても綺麗な……可愛いお嬢様から貰ったんだよ。さよならをする前に……くれたんだ」

その昔話をするママの顔は、どこか寂しそうで、悲しそうな気持ちも混ざっているよ
うな、そんな気がしました。

「もう会えないの……？」

私がそう聞くと……

「うん、きつと……もう会えないと思う。簡単にいけるような場所じゃなかったし、私
がそこに行けたのも、帰れたのも、ある意味奇跡みたいなものだったから」

「そう……なんだ」

私はなんだかとも悲しい気持ちになりました。なんとかできないのかな……と、
そう思っている。

「はいはいっ、昔話はおしまいっ！ ほらっ、急がないと間に合わなくなっちゃうよ？」
ぱんぱんつと二回手たいたいて音を鳴らしたママは、先程の悲しい顔はどこへ消えてし
まったのか、いつものものにつこり笑顔でした。

「え!? あ、ほんとだっ！」

時計を見てみると、学校へは……急いでぎりぎり間に合う時間になっていました。
焦った私をもつと味わいたかったママの料理を急いで食べ、完食しました。

「ぐちそうさまっ！」

「はーい、お粗末さまー」

「ごちそうさまをした後、立ち上がり、急いで食器を洗い場に持っていくと……持ってきていた鞆を背負い、急いで玄関へと向かいました。」

「行くよっ、クリスっ!」

私がそう言うのと、うさぎのぬいぐるみの形をした私のインテリジェントデバイスのクリスがくるくるっと飛びながら私の近くにやってきました。

ちなみにこのクリスの正式名称はセイクリッドハート。少し前に、四年生になったお祝いに、ママとフェイトママが買ってくれたものです。今ではもうすっかり私の大切な相棒で、いつもトレーニングのお手伝いをしてくれたりしていますっ。

「それじゃあ、行ってきま〜すっ!」

「いつてらっしや〜い、あっ……: ヴィヴィオ!」

「?」 なんでしよう?」

家を出る前、ママに呼び止められました。その時のママはなんだかとっても真剣な表情をしていていたので、なんだ私も体に力が入ってしまいます。

「ヴィヴィオ……困っている人がいて、助けてあげられる力が自分にあるなら、そのときは迷っちゃいけないよ」

「んう? うんっ! 当たり前だよ〜!」

「よしっ、それじゃあ、行ってらっしやい♪」

「は〜い〜！」

ママのいつてらっしやいの声を聞いて、今日も学校へ行きます。さあ、今日も楽しい学校生活の始まりですっ♪

最愛の娘、ヴィヴィオが元気に出ていった後、自分のお皿に残った朝ごはんを食べながら、……さつきまでヴィヴィオと話していた、このペンダントをくれた女の人と、その旦那さんのことを思い出していました。

「元気にしてるかなあ……」

私は朝ごはんを食べ終え、洗い物をしながら……昔のことを振り返っていました。ほんの少しの時間だったけれど……ある場所で、とある人達と出会い……そして、過ごした時間。

私にとって、とても大切な……ご主人様のことを……。

私のわがままのせいで、ほんの少ししかお側にいることが出来なかつた人。

私がかもし、こんなことを思っていると知られたら、気にしないでくださいって言われちゃうかもしれないけれど、それでもやっぱり、罪悪感というものは感じてしまう。

だからさつき、ヴィヴィオにあんなことを言ってしまったのかもしれない。

別に今、この世界に戻ってきていることを後悔している訳では無い。そのおかげで今ではもっとたくさんの人と出会えた。それに、大切に大事な娘もいる……。

「後悔はしてないけど……それでも、ね」

洗い物が終わり、椅子に座り……あのペンダントを眺めながら、一言つぶやく。

「まあ、今更言っても仕方ないよね……さくで、今日もお仕事頑張るぞ〜！」

椅子から立ち上がり、ぐっと伸びをすると……一度深呼吸をする。

今日もいい日になるといいな♪

「ふう……そういえば、なんでママはあんなことを……」

学校に向かっていている途中……私はふと、さつきのママとの会話が気になっていました。

「困っている人がいて、助けてあげられる力が自分にあるなら、そのときは迷っちゃいけない……確かにその通りだとは思うけど……」

私もそう思う。困っている人がいて、私に何とか出来るのなら……絶対に助けあげたいって思うもん。

もしかして……さっきのペンダントと……なにか関係あるのかな？

そんな風に考えを巡らせていると……

「ひゃっ!？」

突然、目の前に光っている鏡のようなものが現れました。

「な……なんだろう……これ」

その鏡のようなものはずっと光り続けていました。しかし、周りの人はこの鏡に気づいていないかのように通り過ぎていきます。

「私にしか見えてない……のかな」

気になったので、そつと鏡に触れてみると……

「えっ、ちよ……吸い込まれっ……えええええ!？」

私の体はあつという間に鏡の中に吸い込まれてしまいました。つて、冷静に説明してる場合じゃないよおおお!？」

呼び出されたのは言葉が通じない世界

「ミス・タバサ。あなたの順番ですよ」

声が出た方を向くと、そこには少し頭に寂しさを感じさせる中年の男性……この召喚試験の担当教師のコルベールさんがいた。

この男性を見たことによつて、私が今どんな状況に置かれているかを思い出した。そう、私は今……二年の進級もかかっている召喚試験の最中なのだ。周りには、幻獣であつたりなどの生物と触れ合っている、同じ学園の、同じ制服を着た生徒達もいる。

「それでは始めて下さい」

コルベールさんの声に促され、私は杖の前に突き出して、構えた。私は手に汗が滲んでいることに気がついた。自分でも驚きだが、珍しくも少し緊張しているようだった。

一体どんな生き物が召喚されるのだろうか……他の人たちのように、強力な幻獣であつたりすると……私の立場的にはありがたいが……あまり贅沢はいえない……。でも……もし叶うのならば……もしも、ほんの少しでも……私の願いが叶うのならば……私の、目的を達するためにも……

お願いします……どうか……立派な使い魔を……。私はそう思いながら、召喚の呪文

を紡ぐ。

「我が名はタバサ。五つの力を司るペンタゴン。私の運命に従いし、使い魔を召喚せよ」呪文の詠唱を完了し、鏡のような形をしたゲートが現れる。私はあまりに眩しい光に目をつぶってしまった。光が収まったのを確認し、ゆっくりと目を開けると……そこには。

思い描いていた幻獣や、強力そうな生き物ではなく……人間の……平民の女の子だった。その格好を見るに、学生服のように見えるが……一番目を引いたのは、綺麗な金髪……そして、私達を不思議そうな表情で見ている、オッドアイの綺麗な瞳だった。

一時は静まり返っていた周りの外野も、一気に騒がしくなっていく……どうやら私が人間を召喚してしまったことに驚いているようだった。

けれど、私はその周りの声に耳を傾けている暇もなかった。私の心の中にある……なんとも言えない、失望のような、絶望のような気持ちだが、出てきていたからだ。

しかし、その召喚をされた女の子は……そんな私の不安な心なんて知らないかのように、きよとんと首を傾げていた。

私、見たこともないところにいつの間にか来ている、迷子の高町ヴィヴィオです。なんて、そんなことを自己紹介してる場合じゃないよね！

「こ、ここはどこなの……かな？」

あの光り輝く鏡に吸い込まれて、誰かに呼ばれたような気がしていたら、いつの間にかこんなところに来てるし……

「あつ……人がたくさんいる」

周りを見回すと、黒いマントのようなものを羽織っているたくさんの方がいました。どうやら私のことを見ているようで……私を見ながらなにやらこそそと話をしていました。

どうすればいいのか悩んでいると、水色の綺麗な髪の毛をしていて、眼鏡をかけている女の子が近づいてきました。最初こそ、その髪に見とれていたのですが……距離が近づいてくるにつれて、私は……あることに気がつきました。

その女の子は……とても寂しげな目をしていたからです。最初に会った時のアインハルトさんのような……ううん、それ以上に……まるで感情を押し殺しているような……そんな……

『Hf:jbfukxvxu:jdhjdjd』

「へ……？」

じつとその女の子を見つめていると、その人がなにやら言ってきました。しかし、何を言っているのか、私にはわからない……ということとは……

「言語が違う……?」

『H f b f y v d k v d k g x t h d k j d ?』

「え、えつと……こういう時はどうすればいいんだっけ……」

『f k f b r g x i k e b e y c c i h e v f j』

「うう……どうするもこうするも、お話ができないんだからどうしようもないよね……」
私はガクツと肩を落としました。意思疎通をするにも何も、まず言葉が通じないとどうしようもないのに……。

私が落胆していると……ちよつと頭がすつきりしているおじさんと、青い髪の女の子がなにやら話した後、お互いに頷いていました。

なにか決まったのかな……? も、もしかして私、どこかに連れてかれたりとかしちやうの!?! 流石にそれは困るっ! 連れていくとしても、お、穏便なところだったら嬉しいな……なんて……

私が頭の中で思考を巡らせていると……ちよんちよんつと青い髪の女の子に肩を叩かれ、手招きをされた。

「? 来いってこと……だよね」

今は情報も少ないし……ついていくしかないよね。いざとなったら逃げればいいんだしっ！

そういうことで、私は青い髪の女の子についていくことになりました。

ここは場所は変わって、私は建物の中に来ました。ものすごく大きな建物で……私が通っている学校と同じくらいの大きさかなあ……と考えていたところで、ふと思いついたことがあります。

さつき、あの女の子と同じ服を着た人たちがいっぱいいたし、ここまで歩いてくるまでに……何人もの人が座って話を聴けるような場所もあった、もちろん黒板もあったし……もしかしたらここは学校かなにかなのかもしれない……。

でも……それならどうして私は学校に呼ばれたんだろう……それに、言葉も何も通じないところになんて……。どこか違う星……ということなのかな？ ならママに連絡を取れば大丈夫……なのかな？

まずはどこに連れていかれるのかわからないけど、一段落したら連絡してみようつと。

そう思ったのもつかの間、どうやら目的の場所に着いたらしく、私は一つの一室に案内されました。

「お、おヒゲが立派な……おじいさん？」

そこにはとても長く立派な白いおヒゲを生やした白い髪のおじいさんがいました。

『H f j f g d y v d k h d g y d』

『J g d r j d g g d b s i q h z g d h d』

『G d i y w g u s v c s j d』

またどうやら、なにか話しているようで……おヒゲのおじいさんは何回か頷いた後、私のことを見つめ始めた。

どうしたんだろう……？ も、もしかして……私をどうにかする算段でも話してたのかな？ で、でも、たぶんここ学校だし、そんなことはない……よね？ ご、極秘の学校とかだったら……あるいはあるかも……っていやいやいやいや！ ないよつ、うんっ！

そういつて、無理やり自分を納得させる。

うう……こんなことなら、あの鏡なんて無視すればよかつたよお……

でも、そんなわけにも行かなかつたし……わざわざ呼び出されたつてことは、なにかしら意味があつたはずだし……。

そんなことを考えていると……おヒゲのおじいさんが木製の杖のようなものをひよひよといつと数回振りました。

「えっ、えっ!? なにごと!?」

するといきなり、私に向かって光が飛んできて私を包み込みました。

「通じた…」

「ふえ?」

光が収まると……隣の、青い髪の女の子のいる方から、声が聞こえてきました。

「言葉……通じたみたい」

「え……あ、ほんとだっ!」

「どうやら成功のようです、オールド・オスマン」

「ふおっふおっふお……まあ、これくらいなら朝飯前じゃ」

なんだかわからないけど……あのおヒゲおじいさんがなにかをして話を通じるようになったみたい……。

「えっとお……」

「おっと、そうでしたな……言葉が通じたのならば、どうしてこんなことになっているのか説明しないといけませんね」

「コルベール先生……私が説明します」

「ミス・タバサ？　ですが……」

「私が召喚しました……だからです」

「ふむ……そう言われればそうですね。　ではミス・タバサ、説明を」

「はい……」

青い髪の子の女が説明をしてくれるみたいで、私の方を見て、話してくれました。

「私が貴女を呼んだのは……使い魔の召喚の試験のせい」

「使い魔……？　使い魔って……よく御伽噺に出てくるような、人の相棒のような存在で、幻獣だったりするやつですか？」

「うん……大体あつてる」

なるほど……って……もしかして、私がここに呼ばれたのつてまさか……

「なんとなく察してると思うけど……」

「わ、私が……その、貴女に、呼ばれた……？」

「ご名答……」

「ええええええええ!!？」

高町ヴィヴィオ……どうやら使い魔として、呼び出されてしまったみたいです。

はあ……どうなるんだろう、私。

退学疑惑と微熱との邂逅

皆さん、初めましての人は初めまして。3話目をご覧の皆さんはまた見てくれてあげてください。突然、名も知らないところに召喚されたらしい高町ヴィヴィオです。

「え、えつと……つまり、私はタバサさんの使い魔として、それこそ天文学的な確率で呼び出された……と」

「うん……」

その後、タバサさんは混乱していた私が落ち着くまで待つてくれて……もう一度丁寧に教えてくれました。

ここはハルケギニアという大陸の……トリスティンという国で、そしてこの学校はトリスティン魔法学院というところらしく、今回……この使い魔召喚の試験が行われ……そして、私が呼ばれてしまったみたい。

ハルケギニアという大陸も……トリスティンという国の名前も聞いたことがなかったの、やっぱりここは私のいた場所じゃない……異世界だということがわかってきました。

なので、ここは勇気を持って伝えてみることにしました。

「その……実は私、こここの世界の人じゃないみたいなんです……」

「どういうこと……?」

青い髪の女の子……タバサさんも、コルベールさんという頭のすつきりしているおじさんも、おヒゲのおじいさんのオールド・オスマンさんも、頭にクエスチョンマークがつきそうな顔をしていました。

「その……たいへん申し上げにくいのですが、私のいた場所ではハルケギニア……という大陸も、トリステインという国もなかったんです」

「っ……それ、ほんと?」

「は、はい……」

「ふむ……ということとは、本当に異世界からの召喚ということになりますな……オールド・オスマン」

「そうじゃの……」

「オールド・オスマン?」

おヒゲの……オールド・オスマンさんが、なにやら考え込んでいました。

「いや、なんでもないぞい。それよりも君……えつと、名前は……」

「あ、はいっ! 私は高町ヴィヴィオですっ」

「タカマチヴィヴィオ？」

「変わった名前……」

「ですね……」

ほかの三人から変わった名前だと思われてしまいました……ちよつとシヨックです……。けどやつぱりここは異世界みたい……さつき念話で、クリスにママにメッセージを送ってみて頼んだけど……まだクリスからは何も言ってきていません。

「あのお、一ついいですか？」

「なに……？」

「私、タバサさんに召喚されちゃいましたけど……元の世界に戻る方法……」

「ない……」

「え……な、ないってどういうことですか!!」

あまりの衝撃的な発言に、私はとっさにタバサさんの肩を掴んで強く揺らしていました。

「この召喚の儀式には、呼ぶことは出来ても……返す方法は、ない」

「そ、……そんな……」

そして、嫌なことというのは続いて起きるもので……

クリスから連絡が取れたか……という返事が来ました。その返事は……連絡が取れ

ない……という最悪の状況でした。

「それじゃあ……私は……帰ることが、できない……？」

「うん……一生」

一生帰れない……その言葉が、私に強くのしかかりました。こんなのは夢だ……そう思ってしまったくもなかったが、残念ながら夢というわけでもなさそうで……

「そんな……の……いや、嫌ですよ……だって、そんな……私には、まだ……やりたいことも……一緒にいたかった人も……たくさん……」

口に出してしまうと、強制的に思い浮かんでくる……私を救ってくれて……世界中の誰よりも幸せにしてくれた、ママ……そしてフェイトママ……ノーヴェや他のみんな……一緒にチームにいた、リオやコロナ……そして……アインハルトさん……。

まだ……これからだったのに、これから、皆でいろいろ……たくさんしていくはずだった。ママには……私が強くなっていくところを……私が成長していくところ……見ていて欲しかったのに……本当に……、これから、だったのに……

「そんなのって……そんなのって、ない……よ……う……あ……ああああ!!」

私はその場に蹲り……泣きました。沢山泣きました。……これでもかかってくらい泣きました。泣いて泣いて……こんなにも泣いたのは……いつの頃以来だったかな……確かに、大会で負けた時……リオとコロナと泣いたこともあったし、アインハルトさん

と……本当の意味でわかり合えた時も……泣いたけど……

ここまで泣いたのは、本当に久しぶりだったかもしれない……。

でも……それでも、思いつきり泣けたのは……

「ごめん……」

そう言いながら……私を優しく抱きしめてくれた、タバサさんのおかげかもしれない。かっただ。そのぬくもりはどこか……ママみたいで、だから安心して……感情を吐き出すことができたのかもしれない……と。

私はその後……泣きつかれてしまったこともあり、そのまま、ゆっくりと……眠ってしまいました。

「んっ……んん」

目を覚ますと……そこは、見たこともない個室でした。特に目立った装飾がされていないわけでもない、ベットと……机と椅子、それから、本が置いてあるくらいだった。

「(ハハ)は……」

「目、覚めた？」

「えっ……、あ……タバサさん」

ドアをゆつくり開けられ、タバサさんが入ってきました。

「私は……いつたい」

「たくさん泣いた後……泣きつかれて寝ちゃったみたい」

あ……そういえばそうだったかも……。

「すみません……いきなり泣いたりして」

「ううん……大丈夫、むしろ……いきなりこんなところに連れてきた私が悪い」

そういうと、タバサさんは申し訳なさそうに顔を伏せていたので、私は慌てて手を横に振りながら答えた。

「そ、そんなことないですよっ！ きつと連れてくる人を選ぶことはできなかったんですから！」

私がそう必死にフォローをしようとする、タバサさんはほんの少し驚いたような顔をした後……いつもの無表情に戻った。

「うん……あ、コルベール先生が言ってたんだけど」

「はい……？」

「元の世界に返すことは出来ないけど、最低限暮らせるように補助はするって……だから、落ち着いたら顔を出しに行くといい……」

「あ……えっと、ありがとうございますっ！」

「私は何もしてない……」

タバサさんはそういうと、もういうことはないと言わんばかりに、本を取り出して読み始めた。

無限書庫に通っているんな本を読んでいた身としては、その本にも少し興味があったのだが、たぶん言語が違うので読めないだろう……と、ほんの少し落胆しました。

「えっと……じゃあ、その、コルベールさん……のところに行ってきますね」

「ん……」

タバサさんの返事を聞くと、私はその場からゆっくり立ち上がり、ゆっくりとドアを締め……タバサさんの部屋らしい個室を後にしました。

「えっと……そういうえばコルベールさんはどこにいるのかな……？」

タバサさんの部屋を出た後、コルベールさんを探して学院内を歩いていました。

「それにしても広いなあ……ママの故郷の本で見た……中世……だったかな、その時の建物に少し似てるけど……」

建物の外壁に触れたりしながら、昔……母の故郷の星に遊びに行つた時に読んだ本に出てきたお城に、なんとなく雰囲気似ているなあ……と思つていました。

「つて……そんなことよりも、早くコルベールさんを……」

コルベールさん探しに戻ろうとした時。

「ねえ……お聞きになりました？ ミス・タバサの件なのですが」

「ええ……聞きましたわ」

「ん……なんだろう……？」

タバサさんの名前が挙がついたので、つい足を止めて聞き耳を立ててしまう。いけないことだとはわかつてはいるけど、なんだか気になつてしまった。

「ミス・タバサの召喚した使い魔が、使い魔になることを嫌がつている……らしいですね」

「ええ……そのようですね。大丈夫かしら……ミス・タバサは。使い魔がいなくて、進級ができない……悪ければ退学になつてしまうかもしれないのに」

「えっ!？」

衝撃の事実の声が出てしまったので、慌てて隠れる。最初こそ、周りを見渡して、誰かいたのかと言つていた女の人達でしたが、少し経つとその場から離れていきました。

「ふう……バレなくてよかったあ。でも、退学つて……本当なのかな」

でも……タバサさんはそんなこと、一言も言つてなかったし……、あの人達の勘違いだよ、きつと。それくらいで退学になるなんて、そんなこと……絶対に嘘だよつ。

突然不安になった私は、タバサさんの退学疑惑が本当なのかどうか……最初の目的以外にも、聞くことができちゃったこともあり、絶対にコルベルさんを見つけよう、と決意しました。

それから、私はあちこち探し回りました……落ちかけていた日は完全に沈み、学内もだんだんと暗くなつてきていました。タバサさんに、心配かけちゃつてるかな……と少し思いながらも、今更戻るといわけにはいかないと思いました。

「だつて……もし、本当に退学になったら……ふぎゆつ!？」

「あら……?？」

急いでいた時、突然ぼによんつとした柔らかい何かにぶつかつてしまいました。声が出たような気もしたので、もしかしたら人にぶつかつてしまったのかもしれない。

「ご、ごめんなさいっ! ちゃんと前見てなくてっ」

私は慌てて頭を下げて謝りました。

「いいのよ別に……つて、あら? 貴女……確かタバサの……」

「ふええ……?？」

また、タバサさんの名前が呼ばれ……タバサさんの知り合いなんだろうかと……と、

そつと顔を上げると……

「やっぱりそうねっ！ 金髪だし、目の色が左右違うしっ」

真つ赤な、まるでリオが放つような炎のような色の髪をした、褐色の肌の女性がいました。肌の印象か、はたまた髪の影響か……それとも、妙に大胆に着崩された制服のよ
うなものせいなのか、とても活発な印象を持っている女性でした。

「え、えつと……貴女は……」

「おつと……そうね、自己紹介をしてなかったわ。私は……キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストー。長いから、キュルケでいいわ。貴女は……？」

「は、はいっ！ 私は高町ヴィヴィオですっ！ 宜しくお願ひしますっ」

「タカマチヴィヴィオ？ 変な名前ね」

「うう……やっぱり変なんですかね……私の名前」

ここに來てから、妙に名前を変つて言われることが多い気がします。もしかしたら、私の名前つて変なのかな……、なんだか悲しくなつてきたよ……。

「あつ、そういえば……えつと、キュルケさんは、タバサさんとはどういったご関係で……？」

「そうね……私は、タバサの親友よ」

「あ、……そうなんですわっ！」

タバサさん、なんだか大人しそうな人だったから、もしかしたら友達いないのかな……と思つてたけど、いたんだ……よかったあ……。

「今……タバサに友達がいたんだな〜つて思つたでしょ」

「い、いえいえいえ!!? そんなことないですよ!？」

思つていたことを当てられてしまいました。もしかしてこの人工スパーかなにかなの!?

「ふふふつ……顔に出てたわよ。まあ、タバサには内緒にしておいてあげるわ」

「ありがとうございます……」

本当に内緒にしてくれるのか、少し疑問ですが……なんとかバレずに済みそうです。

あつ……そうだ。もしこの人がタバサさんの親友なら……本当にタバサさんが退学になつてしまうのか。本当のことを教えてくれるかもしれないっ!

そう思つた私は、意を決して聞いてみることにしました。

「あ、あの……キュルケさん」

「ん……? なにかしら?」

「その……もし、私が使ひ魔にならなかつたら、タバサさんが退学になつちゃうつていうのは、本当なんですか!」

私がそう聞くと……先程までの気楽な雰囲気はどこへやら、キュルケさんの目付きが鋭くなり、なにやら……重々しい雰囲気私達の周りを取り囲みました。

「そう聞くことは……貴女、ならないのかしらね……使い魔」

そう言っているキュルケさんの表情は……ほんの少し、怒りのようなものも含まれているように、私は感じました。

タバサの悪夢

「……もう一度聞いわ。タバサの使い魔に、貴女はならない気なの？」

皆さん、初めましての人は初めまして……また見に来てくれた人はありがとうございます。タバサさんの親友のキュルケさんに、すごい怖い顔をされている高町ヴィヴィオです。

「は……はい」

何が気に触ったのか、キュルケさんは鋭い……まるで刃物のような瞳で見えました。

「どうしてなのかしら……？」

「えつと……それは、いきなり連れてこられて……それで、えつと……」

「なによ……特に理由がないんだったら、なつちやえばいいじゃない。使い魔」

「そ、それは……」

確かにそうなんです。私は特に使い魔になりたくない、明確は理由は存在してなかったりします。使い魔にならなくても……元場所には帰れないことは、もう知っているから。ただ……

「いきなり……使い魔になるってことを言われて……動揺しないわけじゃないですかっ！」

私はどこにぶついたらいいかわからない感情も少しのせて、キュルケさんに言いました。

「そりゃあ、動揺するでしょうね……でもね、もう貴女は元の世界には戻れないの。元の世界に家族がいようがなにいようが……ね。だつたらさつさと諦めちゃいなさいよ。タバサの使い魔になっておけば、一応……身の保証はされるのよ？」

キュルケさんは再度、私の思い出したくないことを思い出させてきました。そう……もう元の世界には戻れない……ママ達にも、仲間……友達にも……誰にも会うことは出来ない。

「でも……でも、あんまりですっ！好きで来たかつたわけじゃないのに……いきなりこんなところに連れてこられて……使い魔になってくれなんて……」

「そりゃあ、仕方ないわよ……あれは儀式なんだから。運命と思って諦めることね」

運命……そんな一言で片付けられちゃうの……？あの世界には……私には、まだまだ守りたい人がいて、恩返しをしたい人がいるのに……それなのに。こつちの儀式かなにかはわからないけど……それで引き離されて……離れ離れになって……

「ふざけないでください……」

「ん…………？」

私の心はもう限界でした。ずっと抑えていた…………悲しさではなく…………怒り。ずっと出ないようにしていた、感情…………それがもう、抑えられなくなってしまいました。

「ふざけないでくださいっ!!」

「きやつ!!」

気づくと私は、キュルケさんに飛びつき、馬乗りになっていました。しかし、それを理解したところで、私の心の堤防から溢れた水は…………気持ちは留まることはありませんでした。

「大好きなママや、大切な人達と引き離されてっ!　ずっと傍にいたかった人達と別れさせられてっ!　それで、使い魔になつてっ…………そんなの嫌に決まつてるじゃないですかっ!　私は…………まだやりたいこともいっぱいあった!　恩返ししたい人達もいっぱいいた!　なのに…………そっちの事情で色々と言われたって、はい…………いいですよっ…………言えるわけじゃないじゃないですかっ!!」

「ヴィヴィオ…………」

「勝手ですよっ!　キュルケさんもっ!　この世界の儀式もっ!　…………タバサさんもっ

!!」

「っ…………それは違うわっ!」

「つ……な、なにが……違うんですか……」

ずっと聞いたままだったキュルケさんが、いきなりぐつと私の手首を強くつかんで、私のことをじいつと見つめていました。その力強さに、私の言葉は尻つぼみになってしまいました。

「タバサはね……自分が退学になることを知った上で、貴女に最低限の、なるべく平和な暮らしをさせてあげて欲しいって、ミスタ・コルベールに言っていたのよ……」

「え……」

「自分が呼んでしまったから、本当は自分がそうさせてあげたいけれど、自分には今、それができないから……」

確かに……どうしてタバサさんが私に対して、退学になってしまいかもしれないということを黙っていたのか……私は疑問に思っていました、まさか……タバサさんが……

そう考えていると、いつの間にか馬乗りは直っていて……向き合った状態で私はキュルケさんに肩を掴まれていました。

「確かに……無理やり連れてこられたのに、貴女のことを全然考えてなかったことは謝るわ……ごめんなさい。けど……これだけは信じて欲しいの、タバサは、貴女を呼んでしまったことに凄く罪の意識を感じてる……私のことも儀式のことも、この世界のこ

とも悪く言つて構わない……けど、タバサのことだけは、信じてあげて欲しい……」

今までに見たことのない……弱々しく、大人しいキユルケさんの姿に……私の胸はきゅつと締め付けられるような、そんな気がしていました。その姿からも伝わってくる本気の真面目な雰囲気に……私は、先程の発言を内心、悔いていました。

「……は、い」

「ありがとう……」

私は短く返事をする、その場にいるのが辛くて……キユルケさんから離れて……そつと学院の建物から出ていきました。

学院の建物を出た後、コルベールさんの元へと向かうのが少し……億劫に感じていたこともあり、広場らしいところに体育座りをして……二つある綺麗な月を眺めていました。

そんなことをしていると……私は自分がいつの間にか泣いているということに気づくのも、そう遅くはなりませんでした。

「はあ……強くなるって、約束したのに」

ここに來てから……私は泣いてばかりだなあ。こんなんじゃ……ママに心配かけちゃうよ。

私は取り敢えず自分の涙を制服の袖で拭き、泣くのを我慢するようにしました。

私はもう小さい頃の私ではないんだから、泣いてばかりじゃいけない。元の世界には戻れないかもしれないけど……よくよしてばかりじゃいけないもんっ！

「こんなところにいちや……風邪ひいちやうし、取り敢えずタバサさんの部屋に……つて言うのは流石に、気まずいよお」

もう夜遅くになっているのは、月が出ているところからしても一目瞭然なので、寝るためにも……タバサさんの部屋に戻ることも考えましたが、退学になってしまいかもしれない、なんてことを聞いた後だと……やっぱり顔を合わせるのは少し気まずいです。

「ん……？　ミス・ヴィヴィオ、こんなところでなにをしているのですか？」

「え……？　あつ、コルベールさん」

いきなり名前を呼ばれたので、誰かと思つて振りむくと、そこには……コルベールさんが不思議そうな顔をして立っていました。

「えつと……その、コルベールさんに聞きたいことがあつて……」

「私に聞きたいこと？」

「はい、タバサさんから聞いたんですけど……最低限の暮らしができるように……その、補助をしてくれるって……」

私がそう言うと、コルベールさんは……少し苦いものでも食べたかのような表情になるも、すぐに元に戻り……私の方に向き合つて答えてくれました。

「……ええ、呼び出してしまったのは私達の方ですからね。貴族の暮らし……とまではいかずとも、不自由ない暮らしができるようにするにはするつもりではいますよ」
「あ、ありがとうございます……実は、そのことを聞きたくて、コルベールさんを探していたんです」

「なるほど……そうでしたか、いやはや、お手数をおかけしました」

そういうと、コルベールさんは申し訳なさそうに言いました。

「そういえば、こんなところでミス・ヴィヴィオは何をしていらつしやるのですか？ 夜も深い……こんなところにいるのは、少しどうかも思うのですが……ミス・タバサの部屋には戻らないのですか？」

「うっ……それはあ……えっとお」

コルベールさん、痛いところをついてきました。確かに、目的は達した以上、これ以上外にいる理由もないのも事実で、普通なら……タバサさんの部屋に戻るのが普通なのですが……

「なにか問題でも……？」

「い、いえっ！ そんなことはありませんっ！」

「そうですか？」

「は、はいっ！ それでは私は、タバサさんの部屋に戻りますっ！」

そう言う、私は逃げるようにコルベルさんから離れることにしました。このままだと、自分が気まずくてタバサさんの部屋に戻れないのだということを悟られてしまうかもしれないと思ったからです。

「そうですか……？ それでは、気をつけておかえりください」

「はいっ」

そうして私はコルベルさんと別れ、足取りが重いのを振り払って、タバサさんの部屋に戻ることになりました。もう夜も遅いですし……寝てるかもしれない。という、希望を持ちつつ、憂鬱な気分のまま、私はタバサさんの部屋の前に戻ってきました。

「うう……寝てますようにっ寝てますようにっ！」

タバサさんの部屋の前で、祈ると……ゆっくりとドアを開けました。鍵はかかかってなかったようで、少し不用心だと思いつつも、この場合は運良く……というべきか、タバサさんは寝ているようでした。

「はあ……よかつたあ」

安堵の息を吐き、私は近くにあつた椅子に腰掛けました。

本当ならば……ベットで横になって、睡眠を取りたかつたけど、ベットに潜り込むというのも……ほぼ初対面の人にするにはレベルが高かつたので、前に机に向かって夜、こつそりと本を読んでいて、寝てしまった経験があつたこともあり、私は椅子に座つた

まま、寝ることにしました。

「これで朝早くに部屋を出れば……タバサさんにはバレない……よね」

そう考え、私は取り敢えず目をつぶって……明日に備えて睡眠をとろう……としたのですが、目をつぶってすぐに……なにか声があったような気がしました。

「あ……さま……か……さま」

「ひっ!？」

な、なに!? 何事!? もしかしてだけどつ、この学校って夜にオバケが出るとか出ないとか、そういうオカルト的ななにかがあったりするの!?

「かあ……さま……かあさまっ」

「っ……この声、タバサさん……?」

最初こそ、オバケかなにかかと思っていたのですが、よく耳をすますと、どこかで聞いたことがある声だな……と思って、もう一度よく耳をすましてみると……ベットの方から、タバサさんの声が聞こえているのだということに気が付きました。

「ど、どうしたんだろう……起きてた……ってことはないよね?」

どうしたのだろうかと思つた私は、ベットで眠っているタバサさんの顔をのぞき込んでみることにしました。

「っ……!？」

「かあさま……だめ、それを飲んじや……だめっ」

のぞき込んでみると、そこには……顔に冷汗をかきながら、悪夢にうなされているタバサさんの姿がありました。

「かあさま……タバサさんのお母さん？」

一体何があつたのだろう。夜にうなされるほどのことが……タバサさんのお母さんに起こつたということなのだろうか。……こうしている間にも、タバサさんの悪夢は収まることはなく、ずっとうなされ続けているようでした。

「なんとか……なんとかしなくちゃ……でも、どうすれば」

なんとかしてあげたい、私はそう思いましたが……なにか明確に、確実になにかをしてあげられるような技術は、私にはありませんでした。無力感に苛まれながらも、私にできることを考えました。

「……こんなことしかできないですけど……」

私が昔、怖い思いをして不安になっている時……ママがしてくれたように……それから、ここに来た時、泣いてしまった私に、タバサがしてくれただよように……。

「大丈夫……大丈夫ですよ、タバサさん……」

私はタバサさんのベットに潜り込み、タバサさんの隣に横になって、優しく抱きしめました。

抱きしめたことよってわかったことは、タバサさんがすつごく震えていたこと、感じていた雰囲気とは裏腹の……弱々しく、力を込めすぎたら壊れてしまうんじゃないかという華奢な体……そして、ほんのりと鼻腔をくすぐる匂いと、温もり。

「大丈夫……大丈夫……」

私は続けて、大丈夫……と言い続けました。そんなことしかできない自分に対して無力感を感じながらも、自分にできることを精一杯やることにしました。

「すう……すう……」

すると、いつのまにか……タバサさんの震えが収まっていたようで、安心……とまではいかないかもしれないけれど、悪夢から開放されたのであれば……よかった、と私は思いました。

「なんだか……安心したら眠気が……」

タバサさんの温もりと、色々あったせいか、積もりに積もっていた疲労感のせいかな……私はそのまま物凄い眠気に襲われました。

「このまま、寝ちゃ……」

このまま寝ちやいけな思いましたが、なにぶん身体がいうことを聞かず、結局私は……そのまま……自分の思考を放棄し……眠りにつきました。

貴女を助けたいから

「んっ……」

身体を包み込んでいる、柔らかくて温かい感触を感じ……私は目を覚ました。するとそこには、穏やかな寝顔で寝息をたてている、ヴィヴィオがいた。

どうやら私のベットに潜り込んで寝ていたようで、なんで今私が抱きしめられているかはわからなかったけれど、取り敢えず……戻ってきていたらしい。

「もう……朝」

窓から差し込む光を確認し、今がもう朝だということに気づく。あまり急ぐ必要もないのだが、のんびりしていると、朝食に間に合わなくなってしまうかもしれないので、取り敢えず起きることにした。

「ちよつと……ごめんね」

一言、起こさない程度にヴィヴィオに向かって呟くと、私を抱きしめているヴィヴィオの手をそつとどけ、ベットから降りる。

ベットから降りると、着ているネグレジェを脱ぎ、制服に着替える……別に、この制服に愛着がある訳では無いが、私はもうすぐこの制服を着れなくなると思うと……少し

寂しく感じてしまった。

というのも、この召喚試験で使い魔ができなかった場合、コルベール先生が言うには、私は退学になってしまいうらしい。別に、退学を怖がっている訳では無いけれど、退学をしてしまうのも困る理由があつた……がしかし、そんな私の事情で、十歳くらいの女の子を無理やり使い魔にするというのは、流石に気が引ける。

自分で言うのはなんだが……私みたいに発達が遅いというわけでなければ、きつと彼女は見た目と同じくらい歳の差だろうから。

だから私は……退学をしても仕方ないと思つている。流石に、彼女を巻き込みたくはなかつた。

だからというわけではないのだが、残り幾つあるかわからない学園生活、特に思い出はなかつたが、食事くらいはしっかりと取りたいという、欲望もあり、私は部屋を後にすることにした。

ヴィヴィオはぐっすり眠つていたので、起こしてしまうのとはばかられた……なので、もうしばらく寝かせてあげることにした。ご飯は、帰ってくる時に……誰かに頼んでもらつてこよう。

そう思いながら、私は自分の部屋を出ていった。

部屋を出てからしばらく歩いていると、そこには……キュルケと、コルベール先生が

いた。なにやら必死に何かを話しているみたい。

「あ……タバサ……」

「ミス・タバサ……」

「どうかした……?」

心配そうな顔で二人が私を見ていたので、どうかしたのかと聞いてみることにした。

「どうかしたじゃないわよっ……タバサ、貴女このままじゃ退学になっちゃうのよ!」

「知ってる……」

「知ってるって……いいの!? このまま退学なんて……」

「あの子に無理強いはできない……」

私がそう言うと、キュルケらしくもない……と言ったら失礼だが、少し俯いた後、それはそうだけど……と答えた。いつもの彼女なら、そんなことどうだっていいじゃない。と言いそうだけれど、今回は言わなかった……なにかあったのだろうか。

「ミス・タバサの決めたことならば、私達がとやかく言うこともないでしょう……本当にいいのですね? ミス・タバサ」

「はい」

真剣な表情で私のことを見てくるコルベル先生に、私は一言だけ返した。

「わかりました……では、私は今日の夜までには……ヴィヴィオさんにこのことを伝え

ておきます。明日には家などを紹介するつもりなので、それまでに、なにかあれば……私に言つてください」

「は……」

また一言返すと、私は食堂へと足を向けた。

それに続いて、キュルケも後からついてきた。しかし、私になにかいいかげではあつたが、なにもしやべりかけてくることはなく、結局……食堂に着くまで一言もしやべることは無かつた。

席につき、食べている途中……なにやら騒がしいと思つて、騒がしい原因だと思われる方向を見ると、そこには……ゼロのルイズ……という名で呼ばれているヴァリエールと、黒髪の男がいた。

「あらあら……ルイズも酷いことするわね」

どうやら、パンを床において、それを食べさせるみたいだつた。ヴァリエールも人間の、平民を召喚したらしい。でもあつちは召喚してすぐに契約をすましていたらしく、犬扱いはされていたが、使い魔はしっかりといるらしい。でも……私には関係ない。

「どうでもいい……」

なので、そう一言返しておいた。

**

朝食を堪能した後、特にやることもないので……私は部屋に戻ることにした。ヴィ
ヴィオはもう起きてるかもしれないし、起きてなかったら起こしてあげよう。それに、
読みたい本もあつたし。

そう思い、部屋に戻ろうとすると……

「諸君っ！ 決闘だ！」

金髪の髪の毛をした男……確か名前は、ギーシュ・ド・グラモン……だったか、その
男が……先程のヴァリエールの使い魔に、決闘を申し込んでいた。

でも、別に興味はないので帰ろうとすると……

「面白そうだから見に行きましようよつ、タバサっ！」

「んぐつ……興味無い」

キュルケにマントを引つ張られ、喉が少し締まる……苦しい。部屋には読みかけの本
がある……だから別に、決闘なんて。

「いいからいいからっ……行くわよつ」

「本……」

「やつぱり帰って本を読むつもりだったのね？ いい？ 時には外に出て、刺激を求め

ないとだめよっ」

「……わかった」

「ふふっ、それでいいのよっ！ さあ、行きましようか」

「うん……」

もうこれ以上話していても、きつと事態は好転しないと踏み、諦めてつくことにした。別に何も無かつたら、すぐ帰ればいいだけ……

そう内心思いながら、群れている生徒達の和に、私達も加わったのだった。

そして決闘がはじまったのだが……最初は、金髪の男の方が圧倒していた。それはわかりきったことだったが……その時は本当に面白みもなかった。ただ、メイジが平民を蹂躪する。そんな様を見続けているだけだったからだ。

しかし……あの男、ヴァリエールが名前を呼んでいたので覚えたが……どうやらあの黒髪の男の名前はサイトと言うらしい。その男が……金髪の男が渡した剣を握った瞬間、いきなり動きが俊敏になり、金髪の男のワルキューレを粉碎したのだ。

それは流星に予想外で、キュルケも……周りの生徒達も驚いていた。かくいう私も、内心は驚いていた。あの能力……剣を握ったことで強くなったことから、契約によって手の甲に刻まれたルーンの影響だと考えた。

「帰る……」

でも、今深く考えたところで……あれがなにかはわかるはずもないので、決闘も終わったことだし……私は今度こそ、部屋に戻ろうとした。

「まったく……情けない、情けないぞギーシュ！ 平民ごときに遅れをとるとはなんたる貴族の面汚しだっ！」

しかし……今度は怒気が含まれた声が響き渡った。

「どうやら……まだ私は部屋に戻してはもらえないみたい。」

*
*

「ん……んう……うにや……う？」

ぼかぼかした暖かさと、眩しさで……私は目を覚ましました。

「えつくと……ここは……そういえば私、タバサさんの部屋に戻ってきて……それで、あつ……」

思い出しました。タバサさんのベッドに潜り込んで……抱きしめて落ち着かせようとしているうちに、そのまま寝ちやつたんだった。

「つて……布団に潜り込んで抱きしめるなんて、なんて大胆なことを／＼／＼！！」

私はうろうつと唸りながら、タバサさんのベッドの上で転がりました。恥ずかしさとなんであんなことをしてしまったんだろうという自分の大胆さへの驚愕で、もう顔は

真っ赤になってるだろう。

「はっ……!!? そういえばまだいつものやってなかったっ!」

皆さん、はじめましての人ははじめまして、よろしければ一話から順に見ていただけると幸いです。一話から見てくださいる人はありがとうございます! タバサさんのベットに潜り込んで自分のした行いに恥ずかしさを覚えて自爆している高町ヴィヴィオです。

「ふう……あれ? そういえばタバサさんは……」

一度息を吐いて、冷静になると……今更ながらタバサさんがいなくなっていることに気がつきました。日が登っているところからして、きつともう朝だと思うので……きつと朝ごはんを食べに行つたのかも知れません。

「私のこと……気を使って起こさないでくれたのかな……」

やっぱり……タバサさんは優しいな……使い魔の件と言い……この件といい……タバサさんはいい人だ……。

「でも……使い魔……か」

まだ私は使い魔の件について、どちらにも決心がついていませんでした。タバサさんの使い魔になるという決心も、タバサさんの使い魔にならないで、どこかで平和に暮らすことも……ここまで自分は優柔不断だったかな……と思ってしまうほどに、私はまだ

決断できずにいました。

「はあ……取り敢えず、外に出ようかな……気分転換も大事だよね……うん」

そう自分で口にする、ベットから立ち上がり……外に出ることにしました。朝食は……後でどうすればいいか、コルベールさんに聞いてみよう。

そして私は昨日も来た広場のようなどころに来てみたのですが、なんだか人が集まっ
ていてわいわいがやがやと騒いでいました。

「なんだろう……？　いつもあんな感じなのかな……」

少し気になった私は、その人混みのところに行ってみることにしました。するとすぐ
に、沢山の人の歓声やらかなにやらが聞こえ始めました。

しかし……

「まったく……情けない、情けないぞギーシュ！　平民ごときに遅れをとるとはなんと
る貴族の面汚しだっ！」

男の人の怒声によって、その歓声は打ち消され……静かな空間と、ピリピリとした
……嫌な緊張感が生み出されました。

「どけっ、ギーシュ！　この男の始末はこの私……モブリンガー・モブ・モブディアルが
してやろう」

「ちよ、ちよつと待ちなさいよっ！　サイトはもう勝ったわ！　これ以上戦う理由なん

てっ……」

「そ、そうだつ、僕はもうこの男に負けたんだ。もう決着はついているだろうっ！」

「理由……？ くははっ！ なにか勘違いしているようだな……ミス・ヴァリエール、そしてギーシュよ」

「ど、どういふことよ」

「これから私がするのは決闘ではない、貴族に喧嘩を売り、あまつさえ勝つてしまうような平民に対しての……教育だよ」

少し顔立ちが整っているものの、まるで人を見下しているかのような……見ているだけで、なぜか嫌悪感を覚えてしまう男の人が、ボロボロになっている黒髪の男の人と、ピンクブロンドの髪がとっても綺麗な女の人に向かって、見た目が立派な杖のようなものを向けていた。

その……モブさんという人に向けて、ピンクブロンドのヴァリエールさんと呼ばれていた人と、金髪の男の人のギーシュさんがモブさんに向かって抗議の声を上げていたが、モブさんはその二人の抗議を聞き入れず、教育と言っていました。

「酷い……そんなの、教育じゃないよ」

それとも……この世界ではそれが普通なのだろうか、でも……ヴァリエールさんとギーシュさんはそんな感じじゃないみたいだし……タバサさんだって、優しかったの

に。

「ミスタ・モブリンガー？ 流石にそれはやりすぎじゃないかしら？」

この空気を壊してくれたのは、昨日会った……キュルケさんでした。そしてその隣にはタバサさんもいました。

「ん……？ 君は、ミス・ツエルプストーじゃないか。

悪いが先程も言ったように、これは教育だ。出すぎた杭は引っこ抜かねばならないからな」

「でも、貴族として……決闘を行ったのですから、例え相手が平民であつても、その結果に意義を唱えることは、むしろ、貴族の恥になると思いませんか？」

「うぐつ……そ、それはそうだがな……確かにギーシュにも女性を傷つけた罪はあるが、それに対してあの平民は、最初、貴族を弄ぶような心意が見て取れた……それを放つておくのは、貴族の恥だと思わないかね？」

「それでも、弱った平民に、教育という名目上とはいえ、追い討ちをかけるのは……気高い貴族としてはいただけませんわね」

「ぐつ……そんなものは関係ないっ！ 元々平民など、気にかける価値などないのだからな！」

キュルケさんと、モブさんの言い合いは……私から見ても、圧倒的にキュルケさんの

方が上手だと感じていました。もうモブさんは言い返すことが出来ず、もうほとんど駄々をこねているようにも見えてしまいました。

「それに……ミス・ツエルプストー、君の発言をいちいち気にかける必要はないと私は考えているのだよ」

「あら……なぜかしら？」

「ふっ……なぜなら君の隣にいるのは、あの……使い魔を召喚したにも関わらず、使い魔が拒否し、近い内にこの学園をさるミス・タバサではないか。」

なぜかいきなりタバサさんの名前が上がりました。私はその言葉に反応し、さらに近づきました。そして、そのモブさんの言葉によつて、周りにいた他の人達も騒ぎ始めました。噂は本当だったのか。使い魔に拒否されたんだ……など色々と囁かれています。

「それがどうしたというのかしら……？」

「はっ……使い魔になることを拒否されるような低能な者と、ミス・ツエルプストー、君が付き合っているのなら……それは即ち、君も低能なミス・タバサと同じようなものということだ。そんな者の言う事を聞くことは出来んな」

その発言に、私の心と身体は怒りで震えました。低能……タバサさんは決してそんなことはない……と、私はわかっているからだ。だってタバサさんは……出会ったばかり

の私を大切に思ってくれた。気を使ってくれた。優しく抱きしめてくれた……それなのに……それなのに……

「タバサは関係ないでしょう！ それに、低能……だなんて、発言を撤回しなさい！」

「断る。使い魔一人、言う事を聞かせられないようでは、低能……無能もいいところだ」
私は自然と、拳を握りしめていました。こんなに怒りを感じたのは何時ぶりだろう

……いや、もしかしたら、相手にここまで純粹な怒りを感じたのは初めてかもしれない。

あの事件の時も、私は流されるがままだった。ただ操られ……大切な人を傷つけて、何も出来なかった。あの時感じていたのは、悲しさと寂しさと情けなさ……それから、アインハルトさんの一件があつたけど、こんな気持ちは……初めてに近いと感じました。

私はもう一度拳を握りしめました。

もしも……私が使い魔になったら、オットーやデイドはどう思うかな……。陛下が使い魔だなんて！ って……大騒ぎしちゃうかも。

きつと……皆心配してるよね……もし帰れたら……すつごく怒られちゃうかも……。沢山の人から怒られるのは……ちよつと怖いかな。

フェイトママはきつと泣きながら抱きついてくるかもしれない……。今、フェイトママは泣いてないかな。私が言うのもなんだけど、あまり心配しすぎないで欲しいな。

もしも……私がここで使い魔にならなかつたら……ママは……なのはママはなんて言うかな。

そう思った時、私はママから聞いた……とある言葉を思い出しました。困っている人がいて、助けてあげられる力が自分にあるなら、そのときは迷っちゃいけない……その言葉を、私は心の中でなんども復唱しました。

そう……そうだよ。私はいったいなにを悩んでたんだろう。

タバサさんは困ってた……そして、私がい魔になれば、タバサさんを助けてあげられる……それに、タバサさんが寝ている時にうなされていたこと……きつと大変なことなんだろう。

もしかしたら、私がい魔になれば……助けられるかもしれない。

「むしろここで助けなかつたら……ママに叱られちゃうよね」

うん……きつとこれはキュルケさんが言っていたように、運命なんだ。

私は和の中に入るために、そつと一步を踏み出しました。

この世界にやって来て、誰かを救うために……タバサさんを救うために。私はここにやってきたんだ。

そしてまた一步を踏みだす。

なら……もう迷うことはない。

「つ……なにを……」

「ヴィヴィオ……!?!」

私は、ヴァリエールさんと、サイトさん……そしてモブさんの間に入り、ヴァリエールさんと、サイトさんを守るように、私は立ち、両手を横に広げました。

その途中、驚いているタバサさんとキュルケさんの声も聞こえました。

「ん? 君は誰かな? もしかして、迷子かな」

モブさんは私を見ると、そう言いました。

「いいえ……違います」

「なら誰だい? ここの生徒ではないようだが……メイドか? ならさつさとここを去るんだな……私はこれから、君の後ろにいる男を教育しないとイケないんだから」

私のしたい事、出来ることは……タバサさんを助けること。でも……私がほかにできること……それは

「私は……私は、高町ヴィヴィオ! タバサさんの使い魔ですっ!」

周りで困っている人。助けてって言うてる人、心の中で泣いている人を助けること!!